

## 学位記伝達式 学類長祝辞 (2017.3.22)

今、学位記をお渡しした皆さん、あらためて、卒業おめでとうございます。

そして、入学以来、留学や海外語学研修などで海外に出かけることも多かった卒業生たちを、心配しながらも温かく見守って下さった、本日までご出席の保護者の皆様にも心よりお祝い申し上げます。

今年度は、合計73名の皆さんを社会に送り出すことになりましたが、大学院進学者などを除いて、学類発足以来、初めて就職率100%を達成できました。大変喜ばしいことだと思います。

推薦入試での面接、入学直後の新入生オリエンテーションや新歓合宿。入学当初の皆さんの初々しかった様子を思い出すと、今こうして、4年間あるいは5年間を経て、たくましく、立派に成長し、晴れやかな表情で巣立とうとしている皆さんを目の前にして、大変に感慨深いものがあります。

さて、国際学類は発足以来、その人材養成の目標を次のような言葉で表現してきました。

「グローバル化が進んだ21世紀に、国際社会への洞察力を持ち、異文化との〈しなやかな共生〉を実現できる真の国際人を育成することを目的とし、外国・異文化への探究心、コミュニケーション能力を持ち、将来国際的業務で活躍できる人材を育てる」

国際学類を卒業するにあたって、これまで学類が常に大切にしてきた、「異文化との〈しなやかな共生〉」という言葉は今一度心に刻んでいただければと思います。

21世紀に入ってはや20年近くが経とうとしています。この間、急速にグローバル化が進んだ一方で、最近では、イギリスのEU離脱問題や、アメリカのトランプ大統領誕生によるアメリカ第一主義の台頭など、一方でグローバル化に逆行するような動きも様々見え始めています。世界には、我々人類がともに手を取り合って解決しなければならない問題が山積しています。一方、国内に目を移しても、私たちの進む道には、様々な難問が立ちはだかっています。こういう時代だからこそ、「異文化との〈しなやかな共生〉」という言葉を折に触れ、意識してきてくれたはずの皆さんのような人材が、国内外を問わず、求められているのだと考えて下さい。

<異文化>とは海外の異文化だけではありません。日本国内においても、様々な異文化が存在しています。そして、そうした<異文化>には、見えやすいものと見えにくいものがあります。これからは、様々な人との出会いや経験を通じて、見えにくい<異文化>も理解できるような力をさらに身につけて下さい。

金沢大学、国際学類、そして金沢の街や留学先の国などでの、様々な学びや経験を通じて得たものにどうぞ自信を持って、これからも出遭うであろう様々な<異文化>に、柳の枝のようなしなやかさをもって共生して行ってください。そうすれば、多少の困難は乗り越えられるはずです。

金沢大学は2014年度から10年間、文部科学省のSGU、スーパーグローバル大学創成事業に採択され、国際学類は常にその先導学類としての役割を期待されています。私たちは、このSGU採択を追い風に、現状に甘んじることなく、国際学類をさらに魅力的な学類とするために、努力していきたいと考えています。

手前味噌になりますが、国際学類の良いところは、教員と学生の距離が近いこと、学生思いの教員が多いこと、そして学生同士が同級生はもちろんのこと、先輩や後輩とも互いリスペクトしあい、成長し合っていることだと思っています。学内でも国際学類生のことを褒めてくださる他学類の教員や事務職員がとても多くいます。

そんな国際学類で学べてよかった。ここに在る皆さんの一人でも多くの方が、そんな

ふうにして卒業して下さるならば、私たち学類の教員にとって、これに優る喜びはありません。

最後に、皆さんにお願いがあります。

国際学類はまだ歴史の浅い学類ですが、早いもので、皆さんが6回目の卒業生となります。これまでの400名ほどの卒業生の皆さんが、国際学類の歴史そのものでもあるわけです。

皆さんには、卒業してからも、先輩や後輩、そして私たち教員との絆をいつまでもつないでいただき、ずっと国際学類の応援団でいてほしいと思います。毎年秋に開催している国際学類同窓会にもぜひ参加して、さらに成長した姿を見せて下さい。その日を楽しみにしています。

以上、簡単ですが、皆さんの新たな門出にあたって、お祝いやお願いを申し上げました。

皆さんの今後のご多幸とご活躍を心よりお祈りしています。ご卒業おめでとうございます。